日本のアナルコ＝サンディカリズム運動と「大連流刑囚コミューン」
― 亡命ロシア人ニコライ・ペトロフ＝パヴロフの回想 ―

山　本　健　三

はじめに
1．ニコライ・ペトロフ＝パヴロフについて
2．20 世紀初頭の日本におけるロシアの影響力
3．亡命ロシア人アナーキストが見た日本アナーキズム運動史
4．大連流刑囚コミューン
終わりに

はじめに

本稿では、20世紀初頭から1920年代に活動したロシア人アナルコ＝サンディカリスト、ニコライ・イヴァノヴィッチ・ペトロフ＝パヴロフ（1881～1932）が残した回想記について論じる。後述するように、この人物はロシア革命前から社会革命党（エスエル）で活動した後、流刑先から日本に逃亡してアナーキストとなり、函館と大連での活動後、革命勃発後のロシアに戻ってアナルコ＝サンディカリズム運動に参加したという、他に類を見ない形でロシア革命に関わった。彼が日本や自身の極東での活動について綴った回想記のいくつかは現在、ロシア連邦国立文書館〔Государственный архив Российской федерации（ГАРФ)〕に残されている。本稿で筆者は、このアーカイヴ史料のいくつかに依拠しながら、20世紀初頭のロシアと日本、あるいはその他の北東アジア諸国のアナーキズム運動のネットワークの実像について考察している。

19世紀末から20世紀初頭にかけての時期は、現代のグローバリゼーションに先立つ「初期グローバリゼーション」[1] と呼ばれることがある。この時期に電信が発明され、大洋横断海底ケーブルが敷設され、電報による瞬時の世界的な情報伝達が可能になった。1874

1　Benedict Anderson, *Under Three Flags: Anarchism and the Anti-Colonial Imagination*（London / New York: Verso, 2005), p. 3〔ベネディクト・アンダーソン著・山本信人訳『三つの旗のもとに―アナーキズムと反植民地主義的想像力』NTT 出版、2012年、4頁〕

年に万国郵便連合が設立されると、世界中に手紙、雑誌、新聞、書籍、写真が郵送されるようになった。そして蒸気船によって、国家間、大陸間の大規模移動が可能となり、鉄道によって陸上を大量の人と物が行き交うようになった。人、物、情報が世界中を駆け巡るようになり、国境も距離も関係なく、様々なネットワークが生まれた時代であった。そして近年の研究で明らかにされているように、その最前線にはアナーキストがいた。彼らは電信を通じて世界中に情報を発信し、自国での迫害から逃れて他国に移住し、様々な言語のテクストを翻訳しながら、世界各地の様々な運動を結びつける役割を果たしていた。近年、そのネットワークやアナーキズムの世界的広がりを明らかにする試みが盛んに行われている[2]。しかし、まだ不明な部分が多く、その実態が十分に解明されたとは言い難い。

本稿の目的は、ペトロフ＝パヴロフの回想記の内容を分析するとともに、筆者が現在進めている日本とロシアのアナーキスト・ネットワークの研究にとっての意義を検討することである。つまり、本稿は何がしかの研究の最終的結果を呈示するものではなく、中間報告にすぎない。また、今回の調査（2016年９月下旬）で閲覧した文書は、いずれも「自筆・タイプ打ち」と記されており、ペトロフ＝パヴロフ自身のものであると見なしてよさそうだが、彼がいつ、何のために書いたかは不明であるなど、まだ史料批判の余地が多く残されている。また、後述するように、今回閲覧できたのは、コレクションの一部であり、残ったものの読解にはまだ時間が必要である。これらの点を鑑み、本稿は「研究ノート」という体裁をとっている。

このように研究途上であるにもかかわらず、本稿を世に問いたいと考えたのは、ひとえに閲覧できた回想記が興味深かったからである。ペトロフ＝パヴロフを含むアナーキストの立場からロシア革命に関わった人々の多くは、一部の例外を除き、今日においては殆ど忘れられた存在である。それは彼らが革命闘争の「敗者」であるとともに、思想的にも目ぼしいものを残さなかったことと関わっている。しかし、後述するように、彼の手記には、今日に至るまで不明な部分が多いロシア革命前後の日本とロシアのアナーキズム運動の関わりや、中国と朝鮮半島を含む東アジア全体の革命運動史の解明に関わるような内容が含まれている。それゆえ筆者は、不十分な形であっても、研究ノートとしてまとめておくことに一定の意義があると考える。

本論に入る前に、この研究で使用した文書館史料の概要を記しておきたい。ペトロフ＝

2　アンダーソン（Benedict Anderson）、田中ひかる、ヴァルト（Lucien van der Walt）、ディパオラ（Pietro Dipaola）、ジンマー（Kenyon Zimmer）、メイヤー（Gerald Meyer）らが代表的研究者だが、ここでは個々の業績については省略し、様々なネットワークを通じて世界中に広がった19世紀後半から20世紀前半にかけてのアナーキズム運動に関する代表的研究として、次の共同研究を挙げておく。*Anarchism and Syndicalism in the Colonial and Postcolonial World, 1870-1940: the Praxis of National Liberation, Internationalism, and Social Revolution / edited by Steven Hirsch, Lucien van der Walt*（Leiden/Boston: Brill, 2010）.

パヴロフの回想記は、ロシア連邦国立文書館に所蔵されているキリル・パヴロヴィッチ・ズリンチェンコ（1870～1941）[3] の個人文書コレクション〔Ф. Р-9463〕に含まれている。これは１冊の目録（опись）と147件のファイル（дело）から構成されており、その多くを占めるのは、ズリンチェンコが残した書簡、回想記、ノート、切り抜きである。ペトロフ＝パヴロフの原稿や関連文書を収めたファイルは、32件〔Ф. Р9463, оп. 1, д. 87а ～ 117, 123〕で、これは同コレクション内のズリンチェンコ以外の名義のファイル数としては、突出して多い。しかし、同コレクションにペトロフ＝パヴロフの文書群が収められることになった経緯は、今のところ、不明である。なお、今回筆者が閲覧した2016年９月下旬の時点で、過去の閲覧歴は記されていなかった。

１．ニコライ・ペトロフ＝パヴロフについて

筆者はつい最近までこの人物のことを全く知らなかった。また、西郷隆盛、トルストイ、クロポトキン、幸徳秋水、有島武郎、二葉亭四迷、エロシェンコ、徳富蘆花ら、アナーキズム系の人々を含む日露の知識人の知的交流に焦点を当てた研究として高く評価されているショー・コニシの著書[4]にも登場しない。インターネットで検索してみると、アナーキズム団体と関わりのあるいくつかのサイトで、彼の生涯の簡単な素描が掲載されている[5]。それらと後述するセルゲイ・ブィコフスキーによる紹介に依拠すれば、彼の生涯は次のようにまとめられよう。1881年にロシアで生まれ、1901年からクロンシュタットでエスエル党員として活動し始めた。その後ペテルブルクに移り、エスエルの党組織で働いていたが、1905年、クロンシュタットで逮捕された。1906年、ボブルイスクでの武力蜂起に参加した咎で死刑判決を受けたが、懲役15年に減刑された。この一件を含めて、帝政下では４回逮捕された。1910年日本に脱走したが、1916年にロシアに引き渡された。1917年の革命にはアナーキズム、サンディカリズムの立場からアナルコ＝コミュニスト・ペトログ

３　ボリシェヴィキ系の批評家。元「人民の意志」党員。1895年、文豪レフ・トルストイと知り合い、翌年、彼の発禁論文をキエフで印刷した罪で逮捕された。1901年頃からトルストイの思想に疑問を抱くようになり、1903年にボリシェヴィキになった。1906年に国外へ逃亡、1917年に帰国した。ウクライナ舞台芸術の評論活動でも知られる。См.: *Толстой Л.Н.* Полное собрание сочинений. Том 69. Письма 1896 г. М., 1954. С. 32; *Федина Т.Ю.* Влияние корифеев украинского театра на художественную жизнь дона и кубани // Теория и практика общественного развития. № 4. 2010. С. 227-229; *Ее же.* К портету М.Л. Кропивницкого // Культурная жизнь Юга России. № 3（37）. 2010. С. 9-11.

４　Sho Konishi, *Anarchist Modernity: Cooperatism and Japanese-Russian Intellectual Relations in Modern Japan*（Cambridge and London: Harvard University Asia Center, 2013）.

５　https://libcom.org/history/nikolai-pavlov-aka-petrov-petrov-pavlov（2016年９月30日現在有効）; http://www.s-a-u.org/history/anarhy/1017-anarchist-chronograph-july-part2.html（2016年９月30日現在有効）

ラード連合、モスクワ製パン業者組合、ロシア・アナルコ＝サンディカリスト事務局、モスクワ・アナーキスト労働組合、ロシア・アナルコ＝サンディカリスト総評議会などで活動し、ボリシェヴィキの国家主義政策を公然と非難した[6]。1921年、当時ロシア国内外で最も高名なアナーキストだったピョートル・クロポトキン（1842～1921）が死去した際には、葬儀委員会の中心人物の一人であった。1920年代からは反体制派として秘密警察（チェーカー）に追われる身となった。主に健康上の問題から1929年にアナーキズム運動からの「離脱」を宣言[7]したが、1930年に逮捕され、中央アジアに流刑となり、1932年7月29日、タシケントで死亡した。

彼自身の著作物の中で閲覧が容易な形で残っているものはきわめて少ない[8]。今日でも容易に読めるのは、著名なアナーキズム研究家ポール・アヴリッチが編纂した資料集に収められた3本の声明文[9]である。これら以外にもペトロフ＝パヴロフが関わっていた組合

6　例えばアナーキストやサンディカリストの機関紙であった『労働の声』紙（1917年11月10日付）において、次のようにボリシェヴィキを非難した。

> 来るべき社会革命万歳！
> 政党同士のくだらない口論にはうんざりだ！
> 政党同士が「見解」、「綱領」、「スローガン」、そして権力をめぐっていい争っているだけの憲法制定委員会なんかいらない！
> 新しい、真に革命的な労働者とともにある地方ソヴィエト、無党派陣営万歳！

N.I. Pavlov, “Party Blindness,” *The Anarchists in the Russian Revolution / edited by Paul Avrich*（New York: Cornell University Press, 1973）, p. 99.

7　「離脱（выход）」という言葉が使われているが、実際には、（おそらく強要された）「転向」声明である。1929年2月27日付のソ連共産党機関紙『プラウダ』にペトロフ＝パヴロフを含む6人のアナーキストの「離脱」声明が掲載されたが、例えば、そこには「……最終的に観念論的な理解に通じる要素を一掃し、唯一正統なイデオロギーである弁証法的唯物論（マルクス＝レーニン主義）に完全に同意するものである」という文言も含まれている。Анархисты. Документы и материалы. 1883-1935 гг. В 2 тт. / Т. 2. 1917-1935. М., 1999. С. 505.

8　筆者の調査で判明したペトロフ＝パヴロフが公表した著作物は、次の論文である。また、これらの刊行物の所在は確認できていない。*Павлов Н.* Где-же ты праведный судья? // Коммуна: Орган федерации петроградских анархистов. № 3, май. Пг., 1917.. С. 3-4; *Его же.* На современную тему о войне // Коммуна: Орган федерации петроградских анархистов. № 3, май. Пг., 1917. С. 4; *Петров Н.* Почему я анархист? // Вольный Кронштадт. 23 окт. 1917. С. 2-3; *Павлов Н.* Партийная слепота // Голос труда. 18 ноя. 1917. С. 4; *Его же.* Свободная коммуна и вольный город // Вольный голос труда. 16 сен. 1918. С. 2-3; *Его же.* Парламентаризм и интересы рабочего класса / Общественная жизнь // Вольный труд. № 2, 21 дек. Пг., 1918. С. 18-20; *Его же.* Синдикализм, анархизм и русская революция // Вольный труд.　№ 9/10, дек. Пг., 1919. С. 25-34; *Его же.* Усиливающийся милитаризм в Японии и Америке // Коммуна: Орган федерации петроградских анархистов. № 3, май. Пг., 1917. С. 4-5.

9　*The Anarchists in the Russian Revolution / edited by Paul Avrich*（New York: Cornell University Press, 1973）. この資料集には、“N. Petrov” 名義の “Why I am an Anarchist”（pp. 35-36）、“N.I. Pavlov” 名義の “The Free Commune and the Free City”（pp. 61-63）、“Party Blindness”（pp. 98-100）が収められている。

や団体の機関誌などに論文類が発表された可能性はある。しかし、そうした組合や組織は、実態がはっきりせず、その刊行物を見つけ出すのは極めて困難なのが現状である。本稿で論じている回想記も、どこかで公表された可能性も否定できない。また、彼について書かれたものも少ない。筆者の知る限り、この人物に関するある程度まとまった記述を含む研究業績は、アヴリッチの著名な研究書[10]とブィコフスキーの論文[11]だけである。前者では、1917年11月10日付の『労働の声』第19号に掲載された、当時モスクワ製パン業者組合[12]で活動していたペトロフ＝パヴロフのボリシェヴィキ批判が紹介されている。後者では、1921年から35年にかけて、アナーキストを含む非ボリシェヴィキ系革命家たちの拠点の一つとなっていた全ソ連徒刑囚・強制移住者協会[13]の創設メンバーの一人としてペトロフ＝パヴロフが紹介されている。

以上の略歴に筆者が付け加えたいのは、ペトロフ＝パヴロフが1912年から15年まで函館に居住していたことである。今回閲覧した文書の一つで、第３節で論じる回想記に彼はそう記している[14]。日露戦争の終結後、日本に亡命目的で来日するロシア人が急増したが、その多くは長崎に居住していたといわれている[15]。1870年代以降、流刑囚が日本の漁船を盗んで北海道沖に漂着するケースや、20世紀初頭から日露戦争にかけての時期に沿海州から旧教徒が宗教的な迫害を逃れて北海道に移住してきたケース、サハリンから元流刑囚が逃亡し、北海道沖に漂着したケースなど[16]、北海道にロシア人が辿り着いた例もあった。

10　Paul Avrich, *The Russian Anarchists*（Princeton: Princeton University Press, 1967）〔邦訳：Ｐ・アヴリッチ著／野田茂徳訳『ロシア・アナキズム全史』合同出版、1971年〕

11　*Быковский С.* Анархисты – члены Всесоюзного общества политкаторжан и ссыльнопосенцев // Всесоюзное общество политкаторжан и ссыльнопоселенцев – образование, развитие, ликвидация. 1921-1935. М., 2004. С. 83-108.

12　十月革命頃から1920年代初頭まで存在したアナーキストやサンディカリストが大きな影響力を持っていた労働組合の一つ。1920年11月、その幹部の一人だったペトロフ＝パヴロフは、食品製造系組合連合の創設を試みたが、チェーカーによる弾圧によって挫折した。G. P. Maximoff, *Syndicalists in the Russian Revolution*（Direct Action Pamphlets 11, n. d.）, p. 15.

13　かつて政治徒刑囚や強制移住者だった革命家たちの党派を越えた協力関係の構築を目的として設立された団体。アナーキズム運動の参加者だったパーヴェル・マースロフ（1890～1937）とダニエル・ノヴォミルスキー（1882～？）を中心とするグループに集まった革命家55名を創設メンバーとして、1921年に発足した。クロポトキン委員会と並ぶ、アナーキストとサンディカリストの拠点だったが、1935年、スターリンの命令により、解散に追い込まれた。См.: *Быковский*（2004）, С. 83-84; *Леонтьев Я.В.* Кропоткинский комитет и Кружок народовольцев: к истории взаимоотношений // Труды международной научной конференции, посвященной 150-летию со дня рождения П.А. Кропоткина. Вып. 2. М., 1997. С. 60.

14　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 113, л. 1

15　和田春樹『ニコライ・ラッセル―国境を越えるナロードニキ』中央公論社、1973年、下191頁参照。

16　倉田有佳「トランスボーダーの人流：1930年代初頭―ロシア極東から北海道に避難・脱出した事件を中心に」『ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア（Ⅲ）（21世紀 COE プログラム研究報告

しかし、函館に居住した亡命ロシア人の研究は、基本的にロシア革命以降にやってきた人々に関するもので、それ以前の函館にどの程度亡命ロシア人がいたのかは、現時点では不明である。また、1910年にペトロフ＝パヴロフがどのような経緯で流刑地から函館に辿り着いたのかも不明である。

また、もう一点特筆したいのは、ペトロフ＝パヴロフが日本語を学び、日本人にロシア語を教えることで生計を立てるなど、日本社会での生活にある程度順応していたことである[17]。また、彼の妻アンナ・パヴロワは1916年、夫がロシア政府に引き渡されたとき、日本政府に対する抗議活動を日本人の同志とともに衆議院の前で行ったという[18]。つまり、彼とその妻はそのような協力を得られるほどの人間関係を日本で築いていたことが推察されるのである。このことを強調したい理由は、ペトロフ＝パヴロフ自身が語っているように、そのような亡命ロシア人はそれほど多くなかったように思われるからである[19]。

なお、筆者の知る限り、ペトロフ＝パヴロフの日本滞在は、ブィコフスキーの論文でしか言及されていない。また、６年近くに及んだ彼の国外逃亡期間中の活動についても、従来の研究では言及されていない。

２．20世紀初頭の日本におけるロシアの影響力

前節で述べたように、ペトロフ＝パヴロフは日本に並々ならぬ関心を示し、後述するように、日本の社会主義者とも交際していたと述べている。結論的にいえば、そのような彼の態度は、1910年代前半の亡命ロシア人としては異質である。そのことを確認するため、ロシアのアナーキズムを含む社会主義運動と日本の接触、日本にやってきた亡命ロシア人の状況について若干の説明を行いたい。

ロシアの社会主義者・革命家のうち、最初に日本にやってきたのは、ミハイル・バクーニン（1814～1876）である。1861年、彼は流刑先のシベリアから脱出してヨーロッパに向かう途中、函館と横浜に約１カ月間滞在したことがある。彼は、太平洋を横断し、パナマ地峡を通ってロンドンに辿り着いた。その後ヨーロッパの革命運動に復帰し、第一インターナショナルにおいて、国家権力によらず、人民の連合によって自由社会の実現を目指すアナーキズムを唱え、バクーニンは、カール・マルクスと並び立つ社会主義運動の巨人として、世界中の革命運動に影響を与えていくことになる。

バクーニン以降では、1870年代にバクーニンの弟子であるレフ・メーチニコフ、80年代末にエゴール・ラザレフ、フェリクス・ヴォルホフスキー、1901年にレフ・デイチら

集№17)』北海道大学スラブ研究センター、2006年、67頁参照。

17　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 113, л. 1.

18　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 113, л. 7.

19　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 113, л. 1.

が日本を訪れたロシアの革命家であった[20]。しかし彼らは、メーチニコフを例外として[21]、基本的に単なる通行人にすぎなかった。和田春樹によれば、19世紀末から20世紀初頭にかけての時期において、ロシア人革命家は総じて東アジア情勢に無関心で、日本に対しても、エキゾチシズムに基づく関心以上のものを向けることはなく、日本の社会主義運動についても殆ど何も知らなかったという[22]。

それに対して、日本の社会主義者やアナーキストは、ロシアから革命思想を学び、ロシアの革命運動の動向に注目していた。それゆえにロシアの動向は常に日本の革命運動に大きな影響を与えていた。幸徳秋水は1905年に亡命先のアメリカでマルクス主義からアナーキズムに転向したのだが、その際に大きなきっかけとなったのは、ロシアにおける1905年の革命そのものであったといわれている。民衆の直接行動によって実際に革命が発生するという事態が、幸徳を震撼させたのである[23]。また、20世紀初頭の日本で最も影響力のあった思想家の一人だったクロポトキンは、その代表作が1906年から29年にかけて翻訳されている。28年には『全集』も刊行された[24]。彼の官僚機構や大規模工場における管理に対する反逆や相互扶助といった思想もさることながら、その禁欲的な倫理主義は、トルストイとともに当時の日本の若い知識人、文学者、学生に多大な精神的影響を及ぼした。

さらに、日露戦争時に非戦論を唱えた幸徳秋水ら平民社の活動は、日本とロシアの変革を求める人々の国を超える結びつきを強めるという意義を持っていた[25]。そして日露戦争後にシベリアなどの監獄から逃れた多くの亡命ロシア人が日本にやってきた。特に長崎は、こうしたロシア人が多く居住する都市となった。コニシによれば、革命家ニコライ・チャイコフスキー（1850～1926）は、長崎を「スイスやロンドンとならぶロシア革命運動の三大国際センターの一つ」[26]と評していたという。また、長崎の亡命ロシア人グルー

20　和田（1973）、上195頁。

21　レフ・イリッチ・メーチニコフ（1838～1888）は、1871年のパリ・コミューン敗北後、ヨーロッパに政治的反動の嵐が吹き荒れる中、明治維新を知り、「革命」を実現した日本に関心を寄せるようになった。そして日本語を学び、ジュネーヴに留学していた大山巌のフランス語教師となり、岩倉使節団のメンバー、特に薩摩藩関係者との知遇を得て、日本行きの機会を得、1874年に日本に渡った（渡辺雅司「土着的革命としての明治維新―メーチニコフの日本観の先駆性」『総合文化研究』第12号、2008年、７～15頁参照）。1874年から76年にかけて東京外国語学校魯語科で教えた。彼が同校に導入したカリキュラムは、学生に多大な影響を与え、1908年に東京で結成された最初のアナーキストグループの中心メンバーの多くが同校で学んだ人々だったという（Konishi（2013), pp. 90-91）。

22　和田（1973）、上195～196頁参照。

23　松田道雄「日本のアナーキズム」松田道雄編『現代日本思想体系16 アナーキズム』筑摩書房、1963年、39頁。

24　ナターリヤ・エム・ピルーモヴァ著・左近　毅訳『クロポトキン伝』法政大学出版局、1994年、306～317頁参照。

25　Konishi（2013), p. 197.

26　Konishi (2013), p. 203. チャイコフスキーは、クロポトキンに宛てた書簡（ГАРФ, ф. 1129, оп. 3, д.

プは、彼らの新聞、『ヴォーリャ』に二葉亭四迷、横山源之助、大庭柯公、久津見蕨村、グンジ義男、木村恪、鈴木天眼、上田将など少なからぬ日本人が関与していた[27]。

しかし、1907年秋頃から亡命ロシア人のフィリピンやオーストラリアへの流出が始まり、1908年6月には革命家のグループもほぼ息絶えたという[28]。その背景は一様ではないだろうが、大きな要因の一つは生活苦であろう。今回の調査では「在長崎ロシア人政治亡命者クラブ（Клуб русских политических эмигрантов в Нагасаки）」という団体の文書コレクション（ГАРФ, ф. Р5800）も調査したが、そこからは、この時期のロシア人革命家たちが日本滞在に前向きなものを抱いていたイメージは得られなかった。この文書コレクションにはクラブの規約、議事録、収支報告、請願書、図書目録などが残されているが、日本人との関わりを示すものも殆ど認められなかった。唯一、日本人との接触を物語っていたのは、生活苦から就業、もしくは第三国への渡航のための支援を求めて1908年1月に書かれた、長崎県知事に宛てた請願書[29]だけである。

そもそもこのクラブの設立目的は、規約に書かれているように、あくまでも日本在住の亡命ロシア人に物質的および精神的に同志的な支援を行うことにあった[30]。当時、亡命ロシア人革命家のあいだには、日本政府はロシア政府に自分たちを引き渡すのではないかという疑念があった[31]。実際に1911年9月、日露逃亡犯罪人引渡条約が締結されたことで、彼らの不安はさらに強まったものと思われる。同条約第4条で「政治犯不引き渡し」が謳われていたが、同時に「君主又ハ皇族ノ身體又ハ名譽ニ對スル行為ハ政治上ノ性質ヲ有ス

461）でそのように述べたという。

27　和田（1973）、下121〜157頁。また、近年になって二葉亭が長崎在住の中心的なロシア人革命家ニコライ・ラッセル（1850〜1930）やボリス・オルジフ（1864〜？1934）に宛てた露文書簡が発見され、彼らとの交流が確認されている。沢田和彦「《資料紹介》二葉亭四迷の新発見露文書簡」『文学』第10巻3号、2009年、202〜222頁参照。

28　和田（1973）、下260〜261頁。

29　ГАРФ, ф. Р5800, оп. 1, д. 1, л. 122.

生活苦にあえぐ亡命ロシア人革命家たちが長崎県知事に宛てて書き送った、次のような1908年1月30日付の請願書の写しが残っている。

> 下名長嵜在住露国亡命者等ハ存在手段及ビ事業ノ得難キヲ認メタル為メ困難ノ位置ニ有之即チ少数露国人等ノ恵金ヲ受ケタレモ他邦ヘ罷越シ不能候ヘバ本書請願ヲ以テ御援助ヲ請ヒ當地ニ於テ或ハ事業御世話被下カ又ハ濠州マデ日本汽船ニテ渡航ノ御便宜与ヘ被下ルカ御礼中上候就テハ御決議本書持参人フェドロフ、アントノフヘ御通知被下度此殿奉御願候敬具。
>
> 於長崎一千九百八年一月丗日
>
> 露国亡命者八名署名
>
> 長崎縣知事閣下

ちなみに、この文書の欄外への書き込みによれば、この請願に対して知事は、「そのような請願への対応は、自身の権限が及ぶ範囲を超える」と答えたという。ГАРФ, ф. Р5800, оп. 1, д. 1, л. 122.

30　ГАРФ, ф. Р5800, оп. 1, д. 2, л. 4об.

31　沢田（2009）、207頁参照。

ル犯罪ト認メス」[32]とも明記されていた。これによって、政治犯か否かは、日露両政府の裁量次第で、いかようにも判断が可能だったといえる（後述するように、ペトロフ＝パヴロフは実際に日本の官憲に「刑事犯」として扱われ、ロシア政府に引き渡された）。それゆえにかどうかは断定できないが、多くのロシア人亡命者は日本からアメリカやオーストラリアなどの第三国を目指した。（ペトロフ＝パヴロフが日本に渡ってきた）1910年代前半の亡命ロシア人にとって、日本はあくまでも一時的な滞在先以上のものではなかったように思われる。

その意味で、ペトロフ＝パヴロフの日本に対する強い関心は、1910年代前半の亡命ロシア人としては特殊なものに思われる。ただし、この研究では、彼の内面的な動機は解明できなかった。その点は今後の課題としたい。以下において、動機面は別として、彼の日本に対する関心のありよう、日本およびその租借地における活動について、彼の回想記にそって、論じていく。

３．亡命ロシア人アナーキストが見た日本アナーキズム運動史

最初にとりあげるのは、「日本におけるアナーキズムとサンディカリズム」[33]と題された論文である。これは彼が日本滞在中に得た日本のアナーキズムを中心とする社会運動史に関する知見をまとめたものである。執筆時期は不明である。1923年の大杉栄殺害までで記述が終わっていること、1923年に発行されたソ連共産党機関紙『プラウダ』を参照した箇所があることなどから、その頃に執筆されたのではないかと考えられる。「６年にわたる日本滞在中にありとあらゆるアナーキストと社会主義者と出会った」[34]と述べているように、ペトロフ＝パヴロフは、日本の革命家とも交際していた。彼は日本のアナーキズムとサンディカリズムの展開を概ね正確に記述しているが、それは彼が滞在していた1910年代日本のアナーキズムを取り巻く状況や亡命革命家という彼の立場を考えると、日本人から直接得た情報を抜きに執筆することは困難だったように思われる。

論文には、次のような特徴がある。第一に、ペトロフ＝パヴロフは日本のアナーキズム＝サンディカリズム運動を高く評価していたことである。論文の冒頭で彼は、日本をスペイン、フランス、アルゼンチン、チリ、メキシコなどと並んでアナーキズム＝サンディカリズムが発展した国と位置づけている[35]。

第二に、15頁ほどのさほど多くない分量であり、詳細さを欠くものの、明治維新から1923年までの日本の労働運動の流れが概ね正確に記述されていることである。明治維新

32　清水書店編集部編『司法警察執務要典』清水書店、1924年、377頁。

33　Статья анархиста Петрова-Павлова Н.И. «Анархизм и синдикализм в Японии»（Автограф. Машинопись）［ГАРФ, ф. Р 9463, оп. 1, д. 106］.

34　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 106, л. 1.

35　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 106, лл. 1.

以降の急速な西欧化と経済発展のなかでの労働運動の発生、日清戦争のころの労働運動の隆盛とそれに対する権力側からの弾圧、日露戦争に対する社会主義者の反戦論などの紹介に始まり[36]、1907年以降の社会主義者たちの苦難の時期を象徴する出来事、すなわち大逆事件（1910）を契機とする幸徳秋水（1871～1911）らの処刑、東京市電ストライキ（1911）を指導した容疑での片山潜（1859～1933）の投獄から、その後の鈴木文治（1885～1946）らによる労働者団体、友愛会の結成（1912）に至る歴史が淡々と綴られている[37]。そして改良主義者によって「上から」作られた労働者団体であった友愛会に対して、1916年に結成された印刷工の労働者団体である信友会[38]がアナーキズム的な精神が顕著な団体として紹介されている。友愛会と信友会は、1910年代を代表する二大労働者団体労働者であるが、後者こそ、労働者自身が自分たちの要求を実現するために組織された団体だったとペトロフ＝パヴロフは高く評価している[39]。

ペトロフ＝パヴロフは1916年にロシア政府に引き渡されたので、彼が直接見聞きできたのは、この辺りまでであろう。その後どのように日本の情報を得ていたのかは不明だが、1916年から1923年までの歴史についての記述が続く。米騒動（1918）、森戸事件（1920）、戦前の学生運動の中心組織となる新人会の発足（1918）、下中弥三郎（1878～1961）らによる啓明会の発足（1919）、いわゆる「新しき女」と女性解放運動、武者小路実篤の「新しき村」などが紹介されている[40]。そしてペトロフ＝パヴロフは「アナ・ボル論争」という言葉こそ使用していないものの、ロシア革命以降の日本の社会運動におけるアナーキズム的な路線と国家主義的な路線の論戦も紹介している[41]。さらには1922年に結成された水平社にも触れ、穢多[42]の存在を紹介しながら、被差別部落問題について説明し、平等を目指す団体として水平社を位置づけている[43]。このように運動の発展について述べる一方で、それに対する反動についても触れながら[44]、赤化防止団の米村嘉一郎による高尾平兵衛（1895～1923）の射殺事件、甘粕正彦ら憲兵隊による大杉栄（1885～1923）らの虐殺事件の頃までの歴史を淡々と記述している。

36　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 106, лл. 1-2.

37　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 106, л. 3.

38　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 106, л. 4.

39　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 106, л. 4.

40　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 106, лл. 5-6.

41　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 106, лл. 6-11.

42　ペトロフ＝パヴロフは、穢多を次のように定義している。「穢多とは、日本の有産階級から軽蔑されている階層である。彼らは人数的に非常に多いカーストで、およそ400～500万人もいる。この「特殊部落」の居住者に対する蔑視は何世紀にもわたって存続してきたため、ついに彼らは、自身の人格を守るため、社会に対して抗議の声を上げるようになった」。ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 106, л. 10.

43　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 106, л. 10.

44　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 106, л. 7, л. 11.

第三の特徴は、日本のアナーキストたち、特に大杉栄と、アナーキズムの持つ生命力に対する賞賛である。例えばペトロフ＝パヴロフは、大杉を「際立って優れた、アナーキズムと革命的サンディカリズムと自然科学に関する天才的理論家」[45]、「1911年から18年にかけての労働運動に対する最も厳しい弾圧の時代にも、優れた弁士として労働運動のために終始働き続け、ドイツでもフランスでも公然と日本政府、日本の帝国主義と軍国主義に反対した」[46]、「（労働運動の）天才的教師」[47]などと評している。そして論文は、次のアナーキーな世界の実現を将来に託した一文で結ばれている。

> 私は大胆にも、日本の様々な職業の組合が自由（アナーキー）な共産主義の発展において絶大な役割を果たす日は近いと主張しているのだ。…… 幸徳、ヨシド〔不詳〕、高尾、そして天才的指導者である同志大杉ら、優れた思想的指導者、労働大衆を育ててきたアナーキーな共産主義の擁護者たちは、非業の死を遂げた。だが、運動は死なかった。未来の自由な生活様式、すなわちアナーキーなコミューンに向かって、運動は広く、大きく、強くなっていくに違いない[48]。

アナーキストの居場所が狭くなりつつあったソ連社会のなかで自身の理想を述べた論文の結論部分で興味深いのは、1921年にソ連に渡り、コミンテルン執行委員、スターリン派の一員となっていた片山潜への言及である。論文は、日本のアナーキズム運動史の素描なので、高尾と大杉の死について述べるのに、既にソ連に渡っていた片山への言及は、論旨的に必要ない。しかしペトロフ＝パヴロフは、片山＝ボリシェヴィキの「病理」を告発するかのごとく、高尾と大杉の死ぬ２、３カ月前に、片山がコミンテルンの機関紙で彼らに対する事実無根の中傷を行っていたことに触れている。ペトロフ＝パヴロフによれば、高尾と大杉の死後、片山は革命運動における彼らの功績を認めるような発言をしたが、彼はその少し前まで「大杉と高尾は日本政府のエージェントである」[49]と書いていたという。さらに、彼らが実は「反動派」に転向していて、「大杉は日本政府の命令で、ロシアの共産主義を学ぶために日本の共産主義者とともにロシアに派遣された」、「共産主義の壊滅法を学ぶためにヨーロッパ諸国に送られた」[50]とも書き、大杉らを革命家として否定したという。そしてペトロフ＝パヴロフは次のように述べて、短期間に衒いもなく態度を変える片山＝ボリシェヴィキを非難する。

---

45 ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 106, л. 7, л. 4.
46 ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 106, лл. 13-14.
47 ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 106, л. 7, л. 15.
48 ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 106, л. 7, л. 15.
49 ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 106, л. 7, л. 14.
50 ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 106, л. 7, л. 14.

> 日本の労働者が日本の刊行物においてかような中傷を目にしたら、彼らは片山に何というだろうか。大杉の葬儀にどれほど多くの労働者が参列したか、片山は知らないのだろうか。大杉の死後にアナーキストの革命における多大な功績を認めるとは、彼は恥ずかしくないのだろうか。私には、彼に日本のアナーキストについてそのように語らしめたのは、彼の党派的偏狭さと盲目的な教条主義だと思われる[51]。

このように、日本のアナーキズムとサンディカリズムの歴史について綴った論文は、党派性とイデオロギーが何よりも最優先されるがごとき、片山＝ボリシェヴィキの非人間的な異様さをも指摘する。つまり、この論文は、単なる歴史叙述だけが目的だったのではなく、アナーキズムという方向性の正当性と、国家権力を牛耳っているボリシェヴィキの抑圧性、非人間性を主張するという意図で書かれていたと見なすことができる。

４．大連流刑囚コミューン

次いでとりあげたいのは、「大連流刑囚コミューンでの生活から」[52] と題された回想記である。これも執筆された正確な時期は不明である。1910年にアムール徒刑囚街道から脱走したペトロフ＝パヴロフは、経緯は詳らかではないが、1912年に函館に辿り着いた。そして1915年に大連[53] に移住している[54]。そして彼は自分同様にロシアから脱走してきた人々の団体を結成するのだが、それが大連流刑囚コミューンである。この回想記では、その経緯、コミューンの活動と実態、意義などが書かれている。また前述のように、彼は1916年に日本の官憲によってロシア政府に引き渡されるのだが、その経緯も綴られている。

まずこの大連コミューンの結成の経緯であるが、ペトロフ＝パヴロフが周囲の人々に呼びかけて結成したという。大連に来た時、彼の周囲には５人の政治犯と12人の脱走兵がい

付言すると、高尾は1919年に極東民族大会に出席するため、和田軌一郎や北浦千太郎らとともにモスクワを訪れたことがあるが、大杉がソ連に渡航した事実はない。1923年にベルリンで開催される国際アナーキスト大会に出席するため、渡欧した際、ソ連にも足を延ばし、マフノ運動を調査する予定だったが、1923年のメーデーにパリで演説を行ったことが原因で逮捕・国外追放となり、日本に帰国したため、ソ連渡航は果たせなかった。松田編（1963）、444頁参照。『日本アナキズム運動人名事典』ぱる出版、2004年、119頁参照。

51　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 106, л. 7, лл. 14-15.

52　Воспоминание анархиста Петрова-Павлова Н.И. «Из жизни Дайренской коммуны ссылных»（Автограф. Машинопись）［ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 113］.

53　日露戦争後、ロシアから日本に租借権が譲渡され、1905年から1945年までは、日本の租借地であった。

54　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 113, л. 1.

たが、彼らは支援を必要としていた。彼らはアメリカかオーストラリアに行きたがっていたが、日本語がわからないため、当面の日銭も稼げない状態だったのである。そこでペトロフ＝パヴロフは、大連コミューンの結成を提案し、彼らも喜んでそれに賛同したという[55]。そして彼らは1915年６月、次のような規約を定めた。

1．亡命者から成る「労働人民コミューン」は、無党派の組織である。
2．コミューンの目的は、相互扶助、教育、団結、アメリカへの亡命事情に関する情報提供である。
3．上記の目的を達成するため、コミューンは資金を調達する。

<u>コミューンの原則</u>

1．コミューンは、平等、自由、友愛を原則とする。
2．ロシア語を解する者であれば誰でも、民族、宗教、信条の別なく、コミューンの一員になれる。
3．コミューンへの加入は、コミューンの集会に出席しているメンバーの全会一致によって認められる。
4．コミューンのいかなる問題も、集会に出席しているメンバーの全会一致によって決定する。
5．労働者と手を結べない者、通常の労働によって生活していない者（プロレタリアート的な生活を送っているとはいえない者）は、コミューンの一員になれない[56]。

次いでコミューンの活動内容についてである。コミューンの主な活動は、資金集めであった。大連にやってきた富裕層の旅行者に寄付を募る、国際汽船会社と運賃割引交渉を行うなどの活動を続けた結果、コミューンの最初のメンバー17名はアメリカまたはオーストラリアに渡ることができたという[57]。そしてメンバーの数も増え、時には100人を超えることもあった[58]。

コミューンが拡大すると、日本のスパイに目を付けられるようになり、ロシアの領事館、日本官憲の双方によって、コミューンを分断し、その中心メンバーを逮捕する陰謀が開始されたという。1915年末には、ロシア領事は、方々に手をまわし、コミューンのメンバー８人について逮捕許可を日本政府から得たという[59]。しかし、この動きに対して、ペトロ

55　ГАРФ, ф. P9463, оп. 1, д. 113, л. 1.
56　ГАРФ, ф. P9463, оп. 1, д. 113, лл. 1-2.
57　ГАРФ, ф. P9463, оп. 1, д. 113, лл. 2-3.
58　ГАРФ, ф. P9463, оп. 1, д. 113, л. 3.
59　ГАРФ, ф. P9463, оп. 1, д. 113, л. 3.

フ＝パヴロフは官憲の横暴に対する抗議を電信で当時の総理大臣（大隈重信）と国民党党首に送った。また、国外のマスメディアでも、日本政府に抗議する声が上がった。その結果、数日後にその８人は釈放された。この「勝利」後、コミューンの規模は拡大し、メンバー数が600人近くに達し、1916年末までに87人がコミューンの資金でアメリカに渡ったという[60]。

もっともロシアと日本もコミューンの動向を見張り続け、1916年10月には、徴兵を拒否したトルストイ主義者ら４人の脱走者が日本の官憲に逮捕された。取り調べにはロシア領事も加わり、ロシアに引き渡せるように、逮捕者を政治犯ではなく刑事犯に仕立て上げようとしたという[61]。ペトロフ＝パヴロフによれば、ロシア領事館がコミューンのメンバーを精神的に追い詰めるためにそのような措置を日本側に申し入れていた[62]。さらには日本の官憲を通じて、ロシア領事館の通行証を持たない者へのアメリカ行きの乗船券を販売しないように働きかけていた。コミューンのメンバー＝亡命者は海外渡航用パスポートを持っていなかったので、通行証を取得できなかった[63]。コミューンはロシア領事館と日本の官憲に抗議し、通行証の発行を求めたが、状況は何も変わらなかった[64]。コミューンのメンバーの多くは、まず大連から奉天へ移り、そこから鉄道で朝鮮半島を経由して日本に潜入し、そこからアメリカまたはオーストラリアを目指した。こうしてコミューンのメンバーたちの多くは大連を去り、ペトロフ＝パヴロフら数名を残すのみとなった[65]。

残った者たちも、ロシア、日本、そして中国の官憲が亡命者を拘束するために国境付近の警備を強化しているという情報を聞き、大連からの脱出を急いでいた。ペトロフ＝パヴロフも横浜を目指して準備していたが、ハルビンから２人の亡命者が彼に助けを求めてきたため、出発が遅れてしまい、1916年11月５日、彼は日本の官憲に逮捕された。そして翌日の夜には、長春に駐在していたロシアの官憲に引き渡された[66]。彼の妻アンナ・パヴロワは、コミューンの業務をすべて取りやめ、東京に渡った。日本の社会主義者数名とともに、ペトロフ＝パヴロフをロシアに引き渡した日本政府に対する抗議を衆議院の前で行ったのは、前述のとおりである。

この回想記は、最後に大連コミューンが果たした役割の総括によって結ばれている。ペトロフ＝パヴロフが強調するのは、１年４カ月ものあいだ活動したコミューンが亡命者たちを物質的に支援したこと以上に、「若い脱走者たちを社会主義とアナーキズムの精神で

60　ГАРФ, ф. P9463, оп. 1, д. 113, лл. 3-4.
61　ГАРФ, ф. P9463, оп. 1, д. 113, лл. 4-5.
62　ГАРФ, ф. P9463, оп. 1, д. 113, л. 5.
63　ГАРФ, ф. P9463, оп. 1, д. 113, л. 5.
64　ГАРФ, ф. P9463, оп. 1, д. 113, лл. 5-6.
65　ГАРФ, ф. P9463, оп. 1, д. 113, л. 6.
66　ГАРФ, ф. P9463, оп. 1, д. 113, лл. 6-7.

教育した」[67] ことである。コミューンを経てアメリカに渡った多くの人がアナーキズム的な社会主義運動の担い手となったのだ。そして「現在〔1920年代〕、彼らの多くがソ連の各共和国で労働者と農民のために働いている」[68] と述べて、締めくくっている。

ペトロフ＝パヴロフは以上のように大連流刑囚コミューンの歩みを綴っているのだが、筆者の知る限り、このコミューンに関する研究はない。何らかのかたちでコミューンに言及した研究もない。それゆえにペトロフ＝パヴロフの回想記を今後の研究にどう活用できるかについての判断は難しい。しかし、冒頭で述べた筆者の当面の問題関心と関わるような記述があった。それは次の箇所である。

> 我々は日本、朝鮮、中国の革命家たちとの関係を維持し、社会主義とアナーキズムの文献を彼らの言語に翻訳する作業を支援した。日本の革命家のなかでもとりわけコミューンとの関係を推進していたのは、同志ヤマザキである。彼は1911年に東京で処刑されたアナルコ・コミュニスト幸徳〔秋水〕の友人であった。同志ヤマザキは、個人的に私のところでロシア語を学んでいたこともある[69]。

極東のロシア人コミューンと東アジア各国の革命運動の関係は、これまでのアナーキズム史研究でも殆ど明らかにされていない部分である。このペトロフ＝パヴロフの回想記を史料批判したうえで彼の日本や大連での足跡や、ここに登場する「同志ヤマザキ」の活動を調査することで、日本を含む東アジア各国のアナーキズム運動のこれまで知られてこなかった側面が見えてくる可能性がある。この「同志ヤマザキ」だが、20世紀初頭の社会主義やアナーキズムと関わりがあり、幸徳とも個人的に親交のあったヤマザキ姓の人物となると、筆者には、社会主義者の関わった事件を多く担当した弁護士として著名な山崎今朝弥（1877～1954）しか思い浮かばないのだが、彼がロシア人革命家と積極的に接触していたという話は聞いたことがない。現時点では、特定できない。

ところで1916年11月に大連で逮捕された後の話は、「列車からの逃走」[70] と題された別の回想記に綴られている。内容は、逮捕から彼が自由を得るまでの間の個人的体験談である。要約すると、次のようになる。逮捕後、ロシアの官憲に引き渡されたペトロフ＝パヴロフは、一旦不衛生きわまりない監房に閉じ込められ、その後憲兵にハルビン行きの列車に乗せられた。しかし、かなり規律が緩んでおり、看守が油断した隙に列車から脱走した。しばらくの間、中国人にかくまわれ、その間に同志と連絡をとって援助を求めようと

67　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 113, лл. 7.
68　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 113, л. 8.
69　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 113, л. 4.
70　«Побег с поездка»（Из воспоминания Н.И. Петрова-Павлова, имени Общества политкаторжан）［ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 815］

したが、ロシアの憲兵に見つかり、再びハルビンに移送され、厳しい拷問を受けた。軍事法廷で裁かれる予定であったが、既に時は1917年３月であり、ロシア帝国は２月に勃発した革命で崩壊していた。３月３日、ペテルブルクから恩赦の通知が届き、彼は釈放された[71]。しかしそれは、第１節で述べたように、ロシア革命後にアナーキストとしてボリシェヴィキと対立するようになり、1920年代末には「転向」宣言を事実上強いられた上に中央アジアに流され、流刑地で最期を迎えるという苦難の始まりでもあった。

終わりに

冒頭で述べたように、本稿は、今後の研究の方向性を模索する研究中間報告書のようなものである。ここでは、今回の調査で得た成果とその発展の方向性について述べて、結びとしたい。

第一の成果は、ロシア革命以前に亡命目的で日本に来たロシアの革命家にも、ペトロフ＝パヴロフのように、日本語を学び、日本の社会主義運動やアナーキズム運動の関係者と直接関わったことがある人々の存在が確認できたことである。今後ペトロフ＝パヴロフとその日本人の同志であるヤマザキ、あるいはその他の日本人革命家との関係、彼らそれぞれの足跡を示す史料を集めて分析していくことで、20世紀初頭の日本とロシアのアナーキズム運動の関係の実態が明らかになる可能性がある。

第二の成果は、大連流刑囚コミューンなる団体の存在が確認されたことである。ペトロフ＝パヴロフによれば、この団体は、若い兵役忌避者や脱走者の革命的精神を育むという役割を担っていたほか、日本、朝鮮、中国の革命運動とのネットワークの拠点でもあった。その意味で、（筆者が現在取り組んでいる）東アジアにおけるアナーキスト・ネットワークの研究にとって、このコミューンの実態の解明が非常に重要な課題である可能性がある。

成果は以上の２点に集約されるのであるが、今回の調査で読んできたペトロフ＝パヴロフの原稿に疑問を覚えた部分もある。それは、大連流刑囚コミューンが彼の言うように東アジアの革命運動との連携を志向するものであったとすれば、コミューンの加入条件の一つである「ロシア語を解する」という規約はどのような意味を持っていたのかという疑問である。ロシアのアナーキストに東アジアにおける革命運動の共通言語はロシア語であるという意識があったのか、あるいは他国の運動と結びつく志向性はもともと弱く、何よりも「ロシア人」という同胞意識が優先される組織だったのか、今回読んだ原稿だけでは、何ともいえないところである。

ここにあげた成果は、ペトロフ＝パヴロフの活動のさらなる追跡と大連流刑囚コミューンの実態解明を進めていくことでより深化していくであろうし、疑問についても、何らか

71　ГАРФ, ф. Р9463, оп. 1, д. 815, лл. 1-11.

の見通しが立つものと思われる。

キーワード　ニコライ・ペトロフ＝パヴロフ、アナーキズム、サンディカリズム、亡命、大連流刑囚コミューン

（YAMAMOTO Kenso）